『ハヤブサ消防団』特集

『ハヤブサ消防団』
刊行記念
インタビュー

池井戸潤

故郷の息吹感じる 極上の〝田園〟ミステリ

聞き手・構成／大谷道子
撮影／大槻志穂

この土地には、自分の知らない何かがある――。
ひょんな思いつきから亡き父の故郷で暮らしはじめたミステリ作家が、
成り行きで町の消防団の一員となり、
謎めいた事件に向き合う『ハヤブサ消防団』。
舞台である八百万（ヤオロズ）町は架空の町ですが、作者である池井戸潤さんにとっても、
どうやら因縁浅からぬ土地柄のようです。
血は水よりも濃し、といわれるように、自らのルーツに関わる場所には、
しがらみと同時に特別な感情も宿るもの。
めくるめく謎に翻弄されながら、読み終えた誰もがきっと
胸に沁みいるものを感じるに違いない、本格〝田園〟推理小説。
その誕生には、心強いサポーターたちの後押しがあったといいます。

2022年9月5日発売1925円（税込）

「故郷」を書いておきたかった

――小誌2021年6月号から2022年5月号に連載された『ハヤブサ消防団』は、東京から亡き父の故郷に移住した作家・三馬太郎がひょんなことから地元の消防団に入団し、その町で起こるさまざまな事件に巻き込まれていくという筋立ての本格ミステリ。地方の小さな町を舞台にした、池井戸作品初の〝田園〟小説として、連載中から話題を呼びました。雑誌での小説の連載は、久しぶりですね。

池井戸　そうですね。長らくやっていなかったので、久しぶりにやってみようと。田舎の風物を連作短編ふうに書いてみようかなと思ったのが、この作品の執筆のきっかけになりました。

中部地方の、標高500メートルくらいのところにある山間（やまあい）の町の出来事についてゆるゆると書きはじめたんですが、3回くらいまで書いてみて、これをこの

池井戸潤

故郷の息吹感じる極上の〝田園〟ミステリ

まま10回書いていくのはどうも違うんじゃないかという気がして。そのうち、ただほのぼのとした人間関係だけの集落のはずはない、ここには何かもっと秘密があるんじゃないだろうかという気がしてきたので……それを探ってみたら、こういう物語が出てきたというわけです。

――舞台は《中部地方にあるU県S郡の、山々に囲まれた》八百万町。架空の町ですが、ご自身の出身地にも近い設定です。

池井戸　位置とか、町の規模感はほぼ同じだと思います。だからといって、小説の描写の通りの道を行っても僕の故郷にはたどり着けませんからね（笑）。地名などはオリジナルでつけましたが、登場人物たちが話す言葉のイントネーションや、何事も「まあ、ええやないか」と捉えるようなある種適当なムードは、僕の地元らしい雰囲気かなと思います。

自分の生まれた土地について一度書いておきたいというのは、前から思っていたことです。七年前に亡くなった父からは、地域の行事や祭りのこと、地域にまつわる伝説のような逸話について折に触れて聞かされていたし、地元の友人たちからもいろいろな話を聞いていた。そういうものを記録として残しておきたいと思っていたし、こうした逸話に基づいた小説は、都会に生まれ育った作家には書けないでしょう？　地方から出てきて、そこにいまだに情報源を持つ僕のようなポジションでないと、なかなか難しい。そういう意味では自分のオリジナリティーを出せるだろうし、書くものとしても悪くないんじゃないかと思ったんです。

――両親離婚後の父とは長く音信不通だった三馬。しかし、都会の生活に疲れを感じていた彼は、自然豊かなハヤブサ地区にある《桜屋敷》と呼ばれる父の家に移り住み、生気を取り戻します。そこから町の人々と関わりはじめるのですが、素直な性格が幸いしてか、彼は実に周囲から愛される主人公ですね。

池井戸　きっと周りが親切だからですよ。本人がどうこうというより、桜屋敷の子であるということが、地区の人々に受け入れられる要因じゃないでしょうか。田舎では家が人と密接にくっついているし、そもそも人に屈託がないですからね。基本的には性善説なので、むやみに警戒したりしないのでしょう。

――「基本的には性善説」、どこか聞き覚えのあるフレーズですね（＝「半沢直樹」シリーズ内では決め台詞《やられたら倍返し》とセットで発せられる）。《小説は「人」を書くものであり、故に人を書く作家は、人と会ったとき相手の心の在りようを読もうとする習性がある》は作中の三馬の語りですが、微細にして鋭利な観察眼は彼の武器。池井戸さんも普段、このように事物を見ているのだろうかと感じてしまいました。

池井戸　見てません、見てません（笑）。ただ、「そういうことなのか」とつい心の声が出てしまうところは、作家が主人公の小説らしいところだと思います。

ウソっぽい逸話ほど、実話です

――三馬が入る消防団については、最初から書くつもりだったのですか？

池井戸　そうです。地元にいる同級生たちの多くが実際に消防団に入団していて、以前からその様子をよく聞かされていました。ほとんどは、活動が大変だとか、作品の中にも書いた消防大会（＝全国消防操法大会。各地の消防団が消防器具の操作技術を競い、地区大会を勝ち上がった団体が出場する全国大会が二年に一度開催されている）に向けての訓練が面倒くさいといった文句ですけど（笑）。それでも、田舎での生活には消防団の活動が深く関わっていることは伝わってきたので、書くのならば消防団は欠かせないだろうという思いは当初からありました。

引っ越してきたばかりの三馬は、自治会長に促されて自治会に参加し、その後、流れで連れて行かれた居酒屋で消防団の面々に囲まれ、住んでいる地区のハヤブサ分団に入団することになります。あの場面はまったくの想像で書いたんですが、あとで聞いたところ、手法が非常にリアルだと言われました。とにかく大

『半沢直樹1 オレたちバブル入行組』
講談社文庫

人数で押しかけて断れない雰囲気にするのがコツなんだそうで（笑）。消防団についてのエピソードには、友人たちから聞いた逸話がけっこう反映されています。

――かなり現実の含有率が高いと。

池井戸　そうですね。これまでにも『空飛ぶタイヤ』（２００６年刊）など、実際に起こった事件や出来事をモチーフにした小説を書いたことはありましたが、これだけ実話が盛り込まれた小説は、自分の作品でははじめてだと思います。

――具体的には、どんな部分でしょうか。

『空飛ぶタイヤ』
講談社文庫

池井戸　まず、消防大会の地区大会に向けての訓練の厳しさ。ハヤブサ分団が参加した過去の大会で、団員のズボンが破れたことで笑ってしまい敗退したというのも、実際に聞いた話です。あと、町の《だんじり祭り》の行列に参加した団員が吹く横笛の音がＩＣレコーダーのものであったというのもそう。これは絶対に創作だろうと思われるようなエピソードほど実話であるというのが、『ハヤブサ消防団』の恐ろしいところです（笑）。町興しのために町長と役場が画策したツチノコ探しに駆り出される部分はフィクションですが、まあ、そういうこともいかにもありそうですよね。

消防団の活動の描写だけでなく、三馬の暮らす桜屋敷やハヤブサ地区の描写にも、実際に僕が見聞きしたものが反映されています。神社の鳥居の前に建てた建物ばかりが連続して燃えたとか、山奥にある深い淵がなぜか集落の中にある井戸と繋がっているとか……。

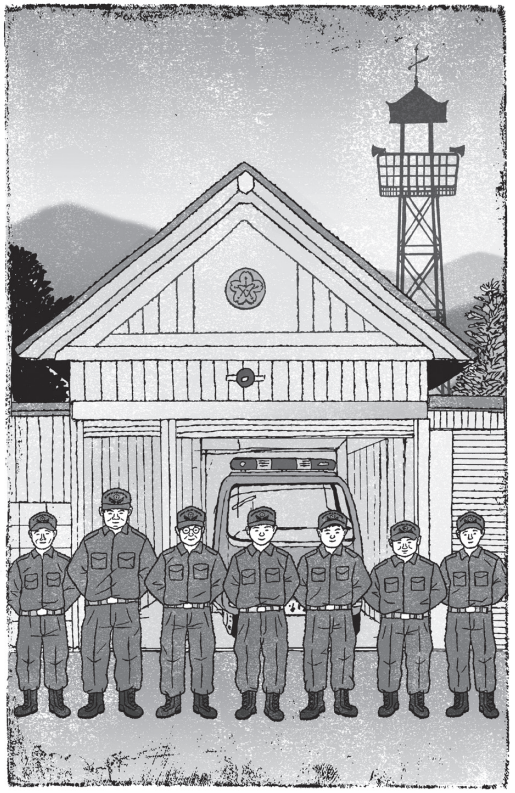
――作中、消防団員が三馬に《何しろ、ここはスーパーナチュラルな場所やでね》と告げますが、そうした現象が実際にあるのでしょうか。

池井戸　そうみたいですね。こうした話は僕が父親から聞いたもので、母や地元の人に聞いても「知らなかった」と言われることが多い。長く住んでいる人も、意外に知らないことがあるようです。だから父も、伝えておかなければと思っていたのかもしれない。ネタ元である父から話を聞いた僕としても、忘れないうちにそれらを書いておきたいと思っていたので、その意味でも、こうして作品にできてよかったのかなと感じています。

――実際の事象がふんだんに取り入れられていることもあってか、四季の自然を背景にしたハヤブサ地区での暮らしの描写は鮮やか。寄合をはじめ、季節ごとの行事の様子もありありと浮かびます。

池井戸　地蔵や神社のロウソクを灯して回る《灯明当番》や、氏神の祭祀を執り

行う《神様当番》、同じようにお寺当番やだんじり祭りの手伝いなども回ってきます。どこの家からも必ずひとりは人を出すのが決まりで、出せないときは「役売り」といって、いくらかお金を払ったりする。父が高齢になった十五、六年前くらいから僕が代わりに手伝いをするようになりましたが、そこでまた人間関係が生まれたりして、いろいろな話を聞けました。消防団ではないけれど、まあ、ボランティア活動のようなものです。


連載第1回装画（イラストレーション：唐仁原教久）

――折々に登場する風土食も、実にユニークですね。中には少々恐ろしげなものもありますが……。

池井戸　たとえば《ヘボ》ですかね。クロスズメバチの幼虫などを採って甘露煮にしたもので、三馬も言っているように意外とおいしいですよ。ただ、《大熊蜂の子》（＝オオスズメバチの幼虫）は、さすがに僕も食べられなかった。小指大のイモムシみたいなやつで、炭火で炙（あぶ）るとうまいらしいんですが、ちょっとね……。生きたマムシを釜に入れて炊く《マムシご飯》の作り方も、父が集落の人から聞いたものです。まあ、実際に作る人はめったにいないと思いますが。

――そうしたものも含めて、描写からは土地の息吹が伝わってくるようで、三馬ではありませんが《この土地こそが、いまのオレが必要としている場所だ。立ち返るべき原点なのだ》という、ある種の郷愁を呼び起こされる心地でした。池井戸さん自身は執筆していて、そのような

思いに駆られたことは？

池井戸　とくに郷愁をそそられたり、里心を揺り動かされるようなことはなかったですが……三馬のように故郷で執筆を？　いやぁ、それはないな。田舎に帰った瞬間に、何もする気にならない。東京の仕事場で、テーブルがあってパソコンがあって、周囲をきっちり囲まれた環境なら書けるのに、実家ではちっとも書けないんですよ。たぶん、ハヤブサ地区と同じように流れているゆるーい空気が仕事をさせてくれないんでしょう。それに、桜屋敷のように、しょっちゅう誰かがやってきては、長話をしていきますからね。あの環境でもちゃんと小説を書いている三馬は、作家として実に真面目な人間だと思います（笑）。

血縁の濃さ、地縁の深さ

——この一見のどかな環境で、次々と怪事件が起こります。立て続けに起こる放火、集落の住人の不審な死……。自警組織の役割も果たしている消防団の面々は、そのたびに消火や捜索に向かいます。

池井戸　火事というのは非常に厄介なんですよね。僕も以前、父と車で出かけたときに、小さな山火事に遭遇したことがあります。ゴミを燃やしていた拍子に山に火がついたと住民の方が血相を変えて飛び出してきて、それで僕たちが燃えた部分を踏んだり叩いたりして消したんですが、なかなか消えない。放っておいたら、たぶんあっという間に燃え広がったと思います。ハヤブサ地区のような過疎地では、消防署から消防車が来る前に消防団が消火に当たるわけですが、本当に大事な働きを、しかもほぼボランティアでされていることには頭が下がります。

　住民の怪死事件で滝壺から死体が上がる様子の描写も、かつて地元で上がった溺死体発見の際の様子を聞き、参考にしました。ちょっと驚くような状況なんですが、実際、そうだったと。

——太郎はミステリ作家らしく状況を冷静に捉え、分析しはじめますが、時間が経つにつれ、事件の背後にハヤブサ地区、八百万町に暮らす人々の複雑な人間関係が明らかになっていきます。放火の被害者も、謎の死を遂げた人物も、町長、警察署長、郵便局長、寺の住職といった町の要職を司る（つかさど）人々も、元をたどれば血縁で繋がっているような間柄で。

池井戸　一見のどかな集落だけれども、一皮むけばそこに隠された人間関係や過去のしがらみが見えてくる……ということですね。ハヤブサ分団のメンバーにしても、いつもは居酒屋で一緒に飲んだりしているけれども、こいつに話すと何もかもすべてが筒抜けになるとか、同級生同士が何かにつけ張り合っているとか、いろいろあるんですよね。

　三馬の親戚の仏具店の夫婦が情報屋のような役割を果たしているのは、もちろん僕の創作ですが、うちの親戚にも仏壇を扱っている家があって、そういう家にはいろんな情報が集まるんじゃないかな

と、想像して書きました。

——さらに、三馬のように血縁をたどってやってくる者だけでなく、町にはある目的のもとに忍び寄ってきた人々がいることも明らかになります。ミステリ小説なので詳細は読んでのお楽しみ……としたいのですが、その中には地方の現実を感じさせる事象も描き込まれます。

池井戸　そうですね。人口が減り、持て余した土地がとんでもない安値で売られているとか、町や山中を不審な人物がうろついているとか、跡を継ぐ者がいない家の墓をどうするかとか。実際、どこの地方でも起こっている問題だと思います。

読者同様、作者だって楽しみたい

——謎が謎を呼ぶ中で、物語は八百万町のある一族のサーガ（＝一族の歴史の物語）へと大きく舵を切ります。ここから最終盤までは息もつかせぬ迫真の展開となりますが、これも当初から予定されていたことなのでしょうか。

池井戸　いやいや、ぜんぜん。なぜかはわかりませんが、途中で急にそういうアイデアが出てきたんです。そういえばあの家の歴史の深層には何か大きな秘密が隠れているんじゃないかと。

——ということは、作者の目は、物語の成り行きを探る主人公のそれとまったく同じだった、と。

池井戸　ええ。情けないことに、先のことがまったくわからないまま、暗中模索で書いていました。読んでいてハラハラしたって？　そりゃあ、そうでしょう。だって、書いている僕にすら先がわからないんですから（笑）。

——ミステリ小説を書いたことがないのでわからないのですが、そうした状況で書きはじめられるものなのですか？

池井戸　僕の場合はそうだということで、たぶんほかの方は違うんじゃないでしょうか。作家の側からすると、とくに小説を書きはじめたばかりのときは、いちばん恐ろしいのは「ちゃんと書き終えられないのではないか」ということだと思います。だから先々まで考えてプロットを組み立てるんですが、僕はそういうことをもうずいぶん前にやめてしまいました。ダメならダメで、そうなったら編集者に謝ればいいやと。もし本当にそうなったら最悪ですが（笑）。

——先が見えない状況で突き進む勇気も、ときには必要だと。

池井戸　そうですね。先にプロットがあると、どうしても小説が予定調和的にな

いけいど・じゅん ◆ 1963年岐阜県生まれ。慶應義塾大学卒。'98年『果つる底なき』で第44回江戸川乱歩賞を受賞、作家デビュー。2010年『鉄の骨』で第31回吉川英治文学新人賞を、'11年『下町ロケット』で第145回直木賞を受賞。主な作品に、「半沢直樹」シリーズ(「オレたちバブル入行組」「オレたち花のバブル組」「ロスジェネの逆襲」「銀翼のイカロス」「アルルカンと道化師」)、「下町ロケット」シリーズ(「ガウディ計画」「ゴースト」「ヤタガラス」)、『空飛ぶタイヤ』『七つの会議』『陸王』『民王』『民王 シベリアの陰謀』『花咲舞が黙ってない』『ルーズヴェルト・ゲーム』『ノーサイド・ゲーム』『シャイロックの子供たち』などがある。

ってしまう。イメージする結末に向かって、書き手はどこかでストーリーやキャラクターの言動を誘導してしまいがちなんです。プロットが本当に精緻にできていればいいのかもしれませんが、原稿用紙800枚を超える小説で、そんなものを事前に用意するのはまず無理なこと。だったら、最初から書いたほうがずっと効率がいいんです。

何より、もう先の決まった物語を書いても面白くないでしょう？　読者だけが楽しくて作者はちっとも楽しくないっていうのは、やっぱりおかしいじゃないですか（笑）。作者だって一緒に楽しみたいわけで、そのためには、書きながら読んで、読みながら書いて、そこにどんな物語が埋まっているのかを、作者自身もが掘り下げていく。それでこそ、本当のエンタテインメントだと思うんです。

——書いていて楽しかったキャラクターは誰ですか？　また、書きながらご自身で盛り上がった場面は。

池井戸　具体的にこの人、と言うのは控えますが、書いていく中で大きく変化して、読み終わった頃にはぜんぜん印象の違うキャラクターになった人が何人かいて、その人たちは書いていて楽しかったし、なかなか深いキャラクターになったんじゃないかと思います。最初は状況で適当に出しただけだったのに、のちに意外にもいい味を出してくれたりして。

場面としては、やはりミステリの解明の手がかりとなるものを発見したときですね。登場人物の行動の理由を探っていく中で発見して、「ああ、なるほど」と書いていて腑に落ちました。場当たり的ではあるけれども、そういうものはその都度その都度発見し、または発明していかなくてはならない。それは、作者ならではの楽しみだし、面白さだと思います。

リアリティ小説はまだまだ続く？

——出版にあたり、連載での掲載原稿から改稿した部分はありますか。

池井戸　終盤部分の人物の動きについて、情報の交通整理を少々行いましたが、その程度ですね。これまで単行本化の際に大きく改稿することが多かったですが、今回は細部のみでした。

——故郷の皆さんは、連載をお読みになっていたのですか？　その反応は。

池井戸　実は連載分の掲載誌が役場で貸し出しをされていて、けっこう人気だったそうです（笑）。消防団の皆さんも喜んでくれて、連載中には、消防大会の描写についてこうしたほうがいいとか、消防車の運転には何人必要かとか、いろいろと教えてくれました。僕のLINEには地元の消防団のグループが登録されているので、そこで随時アドバイスをくれていたのは実に助かりました。

そのほかにも、地元の方から方言や語尾の言い回しについて指摘があったりもしましたね。「間違っとるで、教えてやらなあかん」という感じでしょうか（笑）。八百万町は架空の町ですが、やはり自分の町の物語なのだという意識を持たれたのかもしれません。連載は、こういうやり取りができるのがいいですね。一話書くたびにいろいろな反響をもらえて、楽しかったです。

——出版前にこれだけの手応えがあったのなら、望まれるのはやはりシリーズ化でしょうか。ハヤブサ分団は全国消防操法大会に出られるのか？　など、読みたい場面がいくつも思い浮かびます。

池井戸　全国大会？　絶対に無理ですよ（笑）。でも、消防団についてはまだまだ逸話のストックがあるので、それを生かした物語もできそうです。今回は書きませんでしたが、消防団のゴルフコンペや旅行があって、そのときの話もすごく面白かったので。

——さらなるリアリティ小説、期待します。個人的には、三馬と父の関係についてももっと知りたいと感じました。何しろ、消防団と並ぶ主要な取材先がお父さまなわけですから。

池井戸　そうですね。そういえば、三馬の父親の趣味が写真だということを書いたので、たとえば父の残した古い写真の中に三馬が何かを見つける……とか？　そういうイントロから何か新しい物語が生まれることもあるかもしれません。